

発行所

静岡県高等学校障害児学校教職員組合
静岡市葵区駿府町1-12
高教組新聞編集委員会
http://www.s-koukyousho.jp/
e-Mail info@s-koukyousho.jp
TEL (054) 254-6900
FAX (054) 254-0814
Facebook:「静岡高教組」で検索

第463号
2021年
2月24日

高教組しんぶんは組合費とカンパによって発行されており、全教職員に配布しています

あなたも高教組へ

2面・全国青年教職員学習交流会「TANE!」
・話題の本を読む



講師者の川村さんが勤務したドイツのバイエル社では、上司が社員を呼び止め立ち話をし、個人の研究室まで足を運びよく対話する。会社での上司の主な仕事は社員の能力を引き出すこと。だから社員の意見をいかに聴き取るか、まるで役者のように上手に聴き取るそ

「資質の向上」「職場の活性化」は、対話から

またドイツの教育の最大の目的は平和な民主主義社会の担い手をつくること。子どもたちは小学校に入るとまづ自分が持っている権利について学び、急に大人の評価より授業での発言が重視される。

主張

先月県評女性部初春のついで「仏独の生活から感じたことー働き方子育て・教育と民主主義ー」と題した講演を聴いた。

核兵器禁止条約発効

核兵器の、開発・保有・実験・使用を全面的に禁止、国際法のもとで違法となる「核兵器禁止条約」が1月22日発効されました。

第6回育休復帰応援カフェ

○仕事と子育ての両立、みんなどうしてる？
○妊娠中や子育て中に使える制度、どんなものがあるの？
気軽にご参加ください。
申し込みは下記アドレスへ
info@s-koukyousho.jp

第6回 高教組主催
育休復帰応援カフェ
2021年3月7日(日)
10時~12時 参加費 無料
オンライン開催 (ZOOM使用)
子育てのこと、仕事のこと、みんなで話しましょう!!

「国は10年遅れている。高校も35人学級に」川勝平太県知事が回答

「くらしと福祉・教育の充実を求める国民大運動」実行委員会は、川勝平太県知事に、新型コロナウィルス感染症対策など7項目について申し入れを行いました。今回は「コロナ禍ということもあり代表委員の菊池仁県評議長はじめ6人が参加しました。」



また、「自然はいつたん失われると戻ってこない。人を殺すのではなく、活かすのは水、これを守る姿勢でやっていきたい。その間私がブレたら、遠慮なく言ってほしい」

「国のやっていることは10年遅れている。静岡県は小・中までは35人以下学級にしたが、高校に行くくと40人学級というのは問題だ。離島などに行くと少人数で理想的な学びができていない。高校は県の担当なので、高校までを考えている」

核兵器の、開発・保有・実験・使用を全面的に禁止、国際法のもとで違法となる「核兵器禁止条約」が1月22日発効されました。

「被爆者が願っていた核兵器禁止条約が今日発効しました。」

核保有国と日本には条約に参加してほしい」「唯の被爆国の日本政府には条約に参加してもらおう」と呼びかけました。

藤枝でも、1月23日(土)午後、祝・核兵器禁止条約成立集会&パレードを

「昔内閣は9条改憲するな」と元氣よく声を上げながら約2kmの旧宿場町を練り歩きました。



「核兵器禁止条約が発効されたが、まさきに署名・批准すべき日本が条約に背を向けているのは納得できない。日本政府に核兵器禁止条約の署名・批准を求める署名運動を推進し、核兵器のない真に平和で公正な社会を実現するために全力を挙げよう」と市民に訴えました。

「自分の頭で考えて、自分の仕事をやる」「自分の仕事をやる」「自分の仕事をやる」

「自分の頭で考えて、自分の仕事をやる」「自分の仕事をやる」「自分の仕事をやる」

「自分の頭で考えて、自分の仕事をやる」「自分の仕事をやる」「自分の仕事をやる」

視座

久しぶりにマルクスを齧ってみました。「労働の疎外」、ふむ。労働は、構想と実行で成り立っています。自分の頭で考えて(構想)、自分の仕事をやる(実行)のが労働。しかし、利潤と効率を優先する資本主義社会で、自分の頭で考えることを奪われ、カネのための仕事を強いられる。それが「疎外」。労働が細分化され安価な単純作業に貶められ、労働者は買

「3割は疑問に感じ、4割は揺れている」 「愚痴から民主主義が始まる」

青年交流会 TANE!



全国青年教職員学習交流会
オンライン
2021.2/7 [SUN]
受付 10:00-
第1部 全体会・全体講演 10:30-12:30
第2部 分科会・講座 13:30-15:00
ZOOM 参加無料 申し込みは裏面へ
全体講演
講師:三木裕和さん

2月7日全国青年教職員学習交流会「TANE!」が、Zoomによるオンラインで開催されました。全国から207人が参加し、「コロナ禍の混乱に乗じて」「子どものため」「装った施策が降ってくる中で、本当に子どもを大事にするとはどういうことなのか、子どもたちをどう理解したらいいのか、どうするか、学びました。静岡高教組からも、8人が参加し、学びました。

ら取り組んできた自らの実践を踏まえた講演を聴きました。質疑応答では、若い先生方が現場で感じる悩みがたくさん寄せられました。とくに、教育観や子どもへの接し方の違いに関する悩みに対して、「3割の人は肯定かもしれないが、最低3割は疑問を感じ、残りの4割は揺れているもの」「愚痴から民主主義が始まる」という回答が印象的でした。改めて子どものために何ができるかを考え、職員同士で語りあい、同じ思いの仲間をもつことが、より良い職場づくりにつながることを再確認できました。

午後、実践レポート発表やテーマごとに分かれての分科会でした。「コロナ禍で見つめなおす行事の目的」分科会では、「生徒に競争意識を持たせる影

響」について語り合いました。他者を競争相手と意識する前に、生徒も教師も「競争の相手は自分」と、自分を見つめることから始める必要性を考えさせられました。「障害や困難を抱えて生きる子どもたちと教育」講座では、奈良教育大学の越野和之教授のお話を聴きました。「担任や教員のせいにする風潮が蔓延し、学校が責任を抱え込むことを強いられることで、子どものニーズに反する教育に繋がるおそれがある」と越野教授は警鐘を鳴らしています。そして、「子どもの障害の特性や発達の度合いを正確に理解し、人間の文化や科学を授業という形で子どもに伝えるのが教師の仕事。それは『人類を代表して子どもを愛する』ということである。その教師の専門性と責務を全うすることが、『自分は愛されるに値する存在だ』と子どもが認識する入り口になる。」と語りました。

学校種に関わらず、教師として、子を見守る大人の一人として、人と関わる意味や、自分自身ができることは何かを考えさせられました。コロナ禍は、誰にとっても未曾有の経験でした。特に「〇歳」というかけがえない1年を過ごす子どもたちにとっては、大きな影響がありました。その内面に思いを寄せ、不足があったことは私たち教員だけでなく社会全体で責任を感じ、考えて補うことが必要です。だからこそ、安心して働ける職場作りのために、「職場」「組合」「教研サークル」等で、実践を語り、言葉を綴り、語り合うことが大事です。(青年部長 土井喜)

運営をされ、教育に対して真剣に向き合っている姿を見て非常に良い刺激になりました。

高校教育シンポジウムに参加して

1月30日の「高校教育シンポジウム」にオンラインで参加しました。全国から父母・保護者、教職員、高校生・大学生など144人の参加がありました。分科会では、発達障害など、さまざまな困難を抱える生徒の発達保障の課題と進路問題、高校生・青年の願いや特別ニーズに配慮する育づくり、教育条件整備の内容とその実現の道すじをテーマに討論しました。報告された実践は「一人ひとりの生徒に寄り添う」ことで学校を変えた素晴らしい例でした。生徒の「問題」を「指導」する「ケア」するから生徒の一生を大きく左右する可能性がります。教員一人ひとりが責任を負う重大なことだと認識しなければならぬと感じました。

他に外国由来の生徒や重度身体障がいの子がいます。この質問にも先生の回答が非常に丁寧で、若い先生方の心にも寄り添った回答だったのが印象的でした。「相手の身になる」が教育の基本ということを感じました。

参加者の感想

午後の分科会では、教員のエゴによって生徒に競争意識を持たせることの影響など考えさせられ、自分の経験と重なる部分がありました。グループワークには高校を卒業したばかりの現役の大学生も参加し、学生の目線からの意見も聞くことができました。生徒への声かけとして「競争の相手は自分」という言葉は参考にしたと思います。若い先生方がこの会の

の課題や実践例が発表されました。特に重度身体障がいの生徒を普通高校に受け入れた具体的な実践が紹介され、非常に勉強になりました。ここで学んだことを「自分ごと」として捉え、現場での実践に役立てねば、と思いました。他の発表の資料も一通り読んでみました。どの先生方も、深刻な問題となつていて現状を鋭く突いてレポートにまとめられていました。コロナ禍で学校の教育活動が予定通りできなくなったこの時期にこそ、これまで「当たり前」に行ってきたことが本当に生徒のためになっていないのかを考へるべきだと思えました。何より、全国で多くの先生方が熱く教育の問題に取り組んでいることがわかる良い機会となりました。

第7回 藤枝子育て教育のつどい

1月31日、第7回「藤枝子育て教育のつどい」を稲葉地区交流センター、青島北地区交流センターで行い、親子の参加が50人ほどありました。劇団「風の子九州」の「あそび箱」のオンラインライブ中継を身乗り出して楽しみ、親は「コロナ禍での不安や悩み」をテーマに座談会で交流しました。



「コロナを理由にして中止してしまうのは簡単だが、子どもたちにとってそれでよいのか。考えない人が増えている」

「ある人は子どもを象徴する言葉として『あぶない、きたない、うるさい』をあげ、『それをおとな社会が許容しない限り子どもは育たない』と言っているが、その場が失われている」

「教育の場が、子どもたちの実態から出発して育てるのではなく、型にはめることを強制し競争させているような感じがする」などの思いが交わされました。

こんな時だからこそ、語りあい、子どもたちが存分に遊び、成長できる場を、工夫して実現することの大切さを確認し合うことができました。



「ドイツの学校にはなぜ『部活』がないのか」

松平蔵著 晃洋書房

話題の本を読む 10

日本の教育システムと欧州のそれを比較して、日本の遅れを批判する所謂「出羽守(でわかみ)」との批判を受けるのを承知してこの本を紹介したいと思います。例えばこの本の帯には「じつは、ドイツの学校は午前中で終わります」なんて言葉を読んだだけで「日本では無理」という声が出るでしょうから。しかし、今の日本の部活は、現役プロスポーツ選手にとっても異質(楽しくない)と指摘されており、ドイツのスポーツのことを知っても損はないと思います。

で、ドイツでは学校は13時まで、教員も帰ります。必要な時は家で仕事もします。生徒たちは、午後スポーツという遊びをします。それを受け入れるのはNPOのクラブです。これらのNPOは百年以上の歴史をもつものもあります。戦後民主主義の精神を学校同様学ば機関です(NPOの運営にも生徒は参加できます)。子どもも生徒も対等で、「おまえ」にあたる呼称で呼び合う「ため口」社会だそうです。この競技だけでなく、複数の競技が用意され、複数の施設から生徒が選択します。遊びではなく、よりレベルの高いクラブも選択可能です。ため口「社会」だから年齢での上下はないといえます。また、社会人や年齢によって練習の間帯が分かれているので、2時間程度しか練習しないというのも面白いと思います。

民主主義がしきりに語られるのは、移民が人口の2割程度を占めていることからも不可欠な考え方(歓迎文化)です。時間の区切りがしっかりしているのも、労働者の権利が確立しているからなのかもしれません。時間の区切りのエピソードに、教育実習生が指導教官に指導されている最中、「もう13時を過ぎました」というと、即指導教官は指導を即切り上げたというのは笑ってしまいます。また、スポーツと学習の集団が違つたため、日本の学校のように「たこ壺」状態にならず、いじめは極端に少ないようです。

ドイツと日本では制度や文化も違う。例えば教員を含む労働者の発言がドイツは強い。クラブの歴史も長い。複線の学校制度が前提であることなど。ただ、時間を区切る、場所を変える、時間を短縮する、スポーツを厚生と考える、行政が支援するなどとは真似してもいいのでは。(Y)

